施工者に幸あれ 第44回

建築家・高橋靭一の幸運「やじろべえ」

朝倉幸子◉TH-1
illustration：Taco◉Switch・エンタテインメント

■第一工房の区切り

「ここまでの55年間，皆様のお力添えのおかげで建築をつくり続けることができました……」。今年4月をもって第一工房は，その歴史に区切りを付けた。さらりと身を引いた大建築家・高橋靭一先生は，実にカッコいい。「建築をつくるということは，社会に対して大きな責任を負うこと。何故なら，……永い時間にわたる社会との様々な関わりを通じて，その社会に影響を与え続けるものだから。……真に建築であるためには，その存在そのものが，すべての用を超えて人々にとって様々な意味を持ち，更に時代を超えて人に何事かを語り続けることが大切。（HPより）」。改めて，第一工房の設計姿勢に感銘する。

そんなこととは露とも知らず，子息の高橋真氏（建築家）と覇志堂と4人，高橋靭一先生を囲んで語るひとときを得て，大いに盛り上がったのでありました。

■優秀な頭脳を求めて

建築家の広瀬鎌二（1922～2012年）から，「ボクを武蔵工業大学（現東京都市大学）に引っ張ったのは高橋靭一だよ～」と聞いた。後日お聞きすると，「そうそう，喫茶店に呼び出してねぇ，君は経営より学者だと説得したんだ」と，思い出して愉快そう。

一直線な話術と瞬時の計算で，相手の心を捉える明晰な頭脳の持ち主。高橋靭一先生は，同類を嗅ぎ分けることのできる，野生の人なのです。

絶賛するのは，「塔頂免震」の面々。構造家の和田章氏，竹内徹氏（現東京工業大学教授），彦根茂氏（元Arup代表）である。

注目は，ご出身の東大ではなく，東工大。「キラキラしていて，近寄れば切れてしまうほどの奇才との出会いが，ボクの幸運」「タスクフォースが好きでしたよね」とは，真氏。さすが見ていましたね。

■逆転の発想

技術も，材料も，求めるインタレストがあってこその学問。勝手なことを言って，かつてないことを求めて，恰好だけではなくて形と性能を含めての中でニーズを発見するのが，建築の命でしょう……，と青年のように語る。積層ゴムの上に建物を載せるのが免震の基本，その発想を完全に逆転させ，通常であれば建物の下にある免震装置を屋上へもって行き，そこから建物をぶら下げたのが塔頂免震（清水建設HP／中村豊氏）。「やじろべえ」だ。

■類を見ない設計

都内の一等地に複数件，靭一先生と真氏が設計した個人の住居を含めた建築群がある。それぞれ個性は違うけれど，品のよさと堅実なデザインは共通で，街並みが美しい。共同設計した「青山居」（1998年）も開放感と独特な風格を感じる。パークドーム熊本の構造は，木村俊彦先生（1926～2009年）。当時を思い出しての膜構造談義は尽きない。世界で類を見ない特徴を有する幕構造の施工の苦労は，本誌1997年12月号でフジタの佐藤武博氏も書いている。

■投げキッス

覇志堂の名刺を見て，「橋戸さんか，高橋に戸が付いたよ」。初対面で「靭」を「てい」と読めた人は，今まで岩室に住むたった一人の方だけだと，真氏が言う。「つまんないこと，よく覚えているね，いい息子だネエ，ハハハ」心の通い合った父子。声を潜めて「僕よりモテルらしい」と言う。それだけはないでしょ，センセイ。お帰りのエレベータが閉まる寸前の投げキッス。機智に富んだ高度なトーク同様に，ご健在なのです。禁煙での小一時間，「人生はラッキーだけれど，今の瞬間は不ラッキーだよー」で大爆笑だったのです。